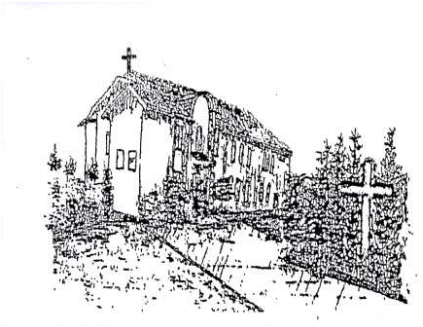

月報

№.４３４
２０１６年
7月

日本キリスト教団
茅ケ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34－35
http://kagawachurch.jimdo.com/

説教『イエスの名によって罪が赦されている』

ヨハネの手紙一 ２章７節～１７節　　小河信一 牧師

ヨハネの手紙一 2:9-11――

9 「光の中にいる」と言いながら、兄弟を憎む者は、今もなお闇の中にいます。10 兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。11 しかし、兄弟を憎む者は闇の中におり、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がこの人の目を見えなくしたからです。

創世記37:4-5――

4 兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。

5 ヨセフは夢を見て、それを兄たちに語ったので、彼らはますます憎むようになった。

本日の主題は、兄弟を憎んでしまう自分の罪に目を向け、主イエス・キリストにあって兄弟を愛するということです。そのことが、今日の聖書個所において、旧約から新約へ貫いて描き出されています。

確かに、目をけたいという思いに駆られて、兄弟姉妹を憎んでしまう現実にをして、なかなか省みないこともあるでしょう。しかしだからこそ、この礼拝の中で御言葉の力によって、兄弟を憎むのか、それと

も兄弟を愛するのか、という問題に向き合い、「イエスの名によって」（Ｉヨハネ2:12）、和解への道を指し示されたいと願います。

旧約の人物、ヨセフの物語は、創世記37章から創世記の終わり・50章までにわたります。この夏、教会学校・サマーバイブルキャンプでは、このヨセフを取り上げて学びます。

創世記50:15-16――

15 ヨセフの兄弟たちは、父が死んでしまったので、ヨセフがことによると自分たちをまだ恨み、昔ヨセフにしたすべての悪に仕返しをするのではないかと思った。16 そこで、人をしてヨセフに言った。

父ヤコブのりのために、ヨセフはじめ兄弟たちは、エジプトからカナンに上って行きました。ヘブロンのマクペラの洞穴にヤコブのなきがらを納めて、無事葬儀が終わりました。そして、皆でエジプトに帰って来た、その時の出来事でした。

実は、ヨセフと兄弟たちはなお、和解・仲直りの途上にありました。確かに、（創世記42:6）ヨセフの屋敷で、ヨセフが身を明かした時、互いに皆、口づけをし、首を抱いて泣きました。そして、ヨセフと兄弟たちは語り合いました（創世記45:14-15）。

そのように修復されたかと見られた兄弟の絆でしたが、一方の側の、の不安、わずかな疑いにより、兄弟の仲にひびが入りそうになりました。謝罪では、一般的にはそうしてはならないと戒められているその場しのぎの手段、すなわち、人をし、人を矢面に立たせることに、兄たちは寄り頼みました。

ヨセフ物語は、創世記37章から50章にまで、全14章に至ります。同じ父のもとにある兄弟の関係が連綿として書き続けられています。兄弟を憎むのか、それとも兄弟を愛するのか、ということが、如何に難題かと分かります。そして、それがどうなったか、が創世記の結末、50章に解き明かされているのです。

新共同訳の創世記50:15-21の標題は「赦しの再確認」となっています。しかしながら、正確には、「赦し」はヨセフ物語ではここに初めて出て来ます。従って、ここで初めて真に、「赦し」という最重要な基礎づけにおいて、主にある兄弟の関係が……ほんものであることが！……確証されると言えましょう。ですから、私たちは、主なる神の計画と成就の下に、ヨセフと兄たちの間の「赦し」がほんとうに打ち立てられているか、に注目したいと思います。

今日、旧新約聖書を取り扱いますので、「兄弟」という言葉の定義を提示します。

旧約・ヨセフ物語では、実の兄弟を、そして、新約・ヨハネの手紙 一 では、教会内の兄弟姉妹、主にある兄弟姉妹を、それぞれ指しています。そこで私たちは、等しくキリストの福音を聴き、それを受け入れている兄弟姉妹との関係を、ヨハネの手紙 一 から教えられることが第一です。そうして次に、「イエスの名によって」兄弟の罪は赦されているという主の宣言にりつつ、実の兄弟や、福音を伝えるべき世にある兄弟姉妹……つまり私たちが普段接している人々……を愛するように、私たちが世に遣わされるという私たちの応答が求められています。

さて、どうして私たちは、兄弟あるいは私たちの普段接している人々を憎んでしまうのか、について、創世記は具体的な状況を踏まえて、そして、ヨハネの手紙 一 はより本質的に、キリストとの関わりにおいて説き明かしています。今、私たちは兄弟を憎んでいる罪深さを省み、そのような罪人を待っておられるキリストのふところに帰って行く道をたどってみましょう。

創世記37:4――

兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。

いたずらに兄たちが一人の弟を憎んだのではないことが、ヨセフ物語の冒頭に明示されています。兄たちの憎しみの発端には、父ヤコブが末っ子に近い（12人中、11番目の男子）ヨセフをえこひいきにする、

と同時に、父の愛情に浴していたヨセフは兄たちのことを父に告げ口をする（創世記37:2）、という事実があったというのです。こうなると、兄弟が不仲に陥ったのは、どっちが先に手を出したか、どっちが卑劣かという点で、泥沼状態になることは目に見えています。

聖書は、「そして兄たちはヨセフを憎んだ」（創世記37:4）と真実を告げていますが、兄たちの立場になれば、えこひいきしている人間とそれによって増長している人間がおかしいのであり、自分たちの態度は正当だ、という理屈になるかもしれません。ただ、弟ヨセフ寄りでも兄たち寄りでもなく、言い得ることは、人間関係の愛憎において「穏やか」であることは大変に難しいということです。自分から観て、受け容れられないような人間関係を目撃したとき、私たちの心は、たとえ憎しみにまで至らないとしても、大きく揺さ振られます。

発端に、肉親の間が泥沼状態であった……人間の原罪が見抜かれている……ことが、創世記37章で提示された後、最後のクライマックス、和解の絶頂へと到達します。兄たちはささいなことで不安になり、周りの信仰者（父ヤコブや仲介者）やその言葉に頼るなどして、ヨセフとの和解は最後の最後までどうなるか、分かりませんでした。

創世記50:16-17――

16 そこで、（ヨセフの兄弟たちは）人を介してヨセフに言った。

「お父さんは亡くなる前に、こう言っていました。17『お前たちはヨセフにこう言いなさい。確かに、兄たちはお前に悪いことをしたが、どうか兄たちのと罪を赦してやってほしい。』お願いです。どうか、あなたの父の神に仕えるたちの咎を赦してください。」

これを聞いて、ヨセフは涙を流した。

父が亡くなると共に、ヨセフと兄たちの和解は、元のになりそうでした。なぜなら、一抹の不安が人を良からぬ言動へと走らせることがあるからです。

実際、和解の途上の最後にもかかわらず、兄たちは人に仲介を頼みました。そして、ヨセフに伝達した言葉も、自分自身のものではなく父の遺言を優先しました。

幸いなことに、仲介者を迎えたヨセフが、「兄たちはどこに居る？　本人たちが謝罪に出向いて来ないのは、どうしてだ？」と憤慨することはありませんでした。

「人を介して」罪の赦しをうという人せのやり方は、多分に危険をんでいます。和解の当事者は、初めは後ろに控えており、最後に登場するというやり方は、ひょっとしたら、ヨセフの兄たちが「信仰」の父ヤコブから受け継いだものなのでしょうか。子供たちは、当事者の登場は急いではならないという、慎重とも、ずる賢いとも言える父の姿勢にったのでしょうか。

かつて、父ヤコブは20年振りに、ヤボク川を渡って、故郷へ帰還したことがありました。兄エサウとのいさかいが20年もの間、放置され、継続された中での、和解の場面への突入でした。兄への贈り物を先送りし、妻と子どもを先に渡河させながらも、ヤコブは独り後に残りました（創世記32:25）。そして、ヤコブはヤボクのほとりで一夜を明かしました。ここで驚くべき神の介入、神との格闘という出来事が起こりました。そうして、ヤコブは最後の最後には、自分が「先頭に進み出て」、兄エサウの前にひれ伏したのです（創世記33:3）。

弟ヨセフと兄たちの和解においても、問題なのは、謝罪の流儀・作法ではなく、ひとえに神が介入されるかどうか、に掛かっていると言えるでしょう。

ヨセフの兄たちが、伝達者に託した言葉（創世記50:17）は、父の遺言と兄たち自身の言葉に分けられます。以下、新共同訳を直訳風に変えると―

父　……「どうか、あなたの兄たちのと罪を、どうか赦してください。」

兄たち……「どうか、あなたの父の神に仕えるたちの咎を赦してください。」

父の方には、「どうか」が二回繰り返され、「咎」と「罪」とが重ねられています。父の遺言を「に取って」とも見なせなくはありませんが、兄たちは自ら弟に赦しを乞いました。その後、兄たちは、ヨセフとの涙の対面を果たしました（創世記50:18）。

私たちがこのヨセフ物語から学ばせられる大切なことは、仲直りや和解に、理想的な正しい一つの道があるのではない、ということです。その途上に、それぞれの場面で、失敗・困難・危機などが生じつつ、私たちの思いをはるかに超えて道が切り開かれていくということです。

創世記50:19-20――

19 ヨセフは兄たちに言った。

「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。20 あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」

ここで先に提示した、ヨセフ物語・終局の注目点を捉えることにしましょう。果たして主なる神の計画と成就の下に、ヨセフと兄たちの間の「赦し」が打ち立てられているか、どうかということです。

兄たちから「赦し」を乞われたヨセフが、自分が「神に代わる」ことは許されないと宣言しています。そして、あなたたちの「悪」、すなわち、弟への憎しみ、殺意、無関心、そして恐れによる（参照：讃美歌385番「うたがい迷いの闇夜」）をも用いて、主なる神は自らの計画を進め、成し遂げられる、とヨセフは兄たちに説き明かしました。

「今日のようにしてくださったのです」というのは、「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ている」（Ⅰコリント15:10 口語訳）という意味でしょう。言い換えれば、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」（Ⅱコリント6:2）、ついに今日という日が巡って来たということです。ヨセフの言葉は、神が兄たちの罪を赦し、死と罪の闇から救い出してくださったことを指し示しています。ヨセフはその恵みに押し出されて、兄たちと家族を養い、慰めようと、兄たちの心に、優しく語りかけています。

創世記の結末において、兄弟を憎んでいた人々が赦し合ったという物語は、終わりの時に向かって歩んでいる私たちの物語として語り継がれるべきものです。そして実際に、ヨハネの手紙の著者は、ヨセフ物語を暗示しながら、あなたがたは兄弟を憎むのか、それとも、兄弟を愛するのか、と問いかけたのです。端的に言えば、人と人との愛憎は永遠のテーマであります。

ヨハネの手紙 一 2:7-8――

7 愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しいではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です。この古い掟とは、あなたがたが既に聞いたことのある言葉です。8 しかし、わたしは新しい掟として書いています。そのことは、イエスにとってもあなたがたにとっても真実です。闇が去って、既にまことの光が輝いているからです。

要するに、ヨハネの手紙の著者は「古い掟」を今、主イエス・キリストにおいて、「新しい掟」として受け止めなさい、と勧めています。その勧めの内容から観て、この「掟」は、〈最も重要な掟〉「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ22:39 / レビ記19:18）を指しています。

著者は、「新しい掟」、最も重要な掟が古びていませんか、今日、新鮮な心をもって、実行しようではありませんか、と教会員を励ましています。それが古びてしまっているなら、今一度、礼拝に臨在したまう主イエス・キリストから、その教えを聴いて、隣人を愛する者となりなさい、と語っています。

ヨハネの手紙 一 2:9及び11――

9 「光の中にいる」と言いながら、兄弟を憎む者は、今もなお闇の中にいます。

[11] しかし、兄弟を憎む者は闇の中におり、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がこの人の目を見えなくしたからです。

注解者・J.シュナイダーは、「暗黒の中を歩むとき、人は方向感覚を失ってしまう。彼はあてどなくあちらこちらと暗中模索するばかりであり、その行きつく所を知らない」と、闇の中を歩む人の姿を明示しています。そのような悲惨な状況にもかかわらず、その人は「光の中にいる」と自己主張しています。恐るべきは、私自身の魂が内なる袋小路に入り込むことです。

主イエスは、このように周りの兄弟を憎み続けている人の悲惨さに光を当ててくださるお方です。主は、まさに迷い出た一匹を捜し出し、小さな者が滅びないように、助け出してくださいます（マタイ18:10-14）。

ヨハネの手紙 一 2:12-14は、二部構成の詩のような形で、教会員への励ましがこだましています。〈子たち〉または〈子供たち〉（幼な子というニュアンス）→〈父たち〉→〈若者たち〉という呼びかけが、2:12-13及び:14で、２回繰り返されていいます。〈子たち〉または〈子供たち〉は年齢的な区分というよりも、「私の愛する子らよ」と、親しみを込めて全教会員に訴えているという説もあります。いずれにしても、ここで、ヨハネという説教者は、教会の中の三つの世代を取り上げ、その教会の特徴を見据えながら、優しく語りかけています。しくもそれは、2016年度、「老人は夢を見、若者は幻を見る――世代から世代へ、信仰から信仰へ」という教会標語を掲げている茅ヶ崎香川教会に向けて、「子供たちよ」、「父たちよ」、「若者たちよ」と呼びかけられているかのようです。

ヨハネの手紙 一 2:12――

子たちよ、わたしがあなたがたに書いているのは、
イエスの名によって
　　あなたがたの罪が赦されているからである。

兄弟間の憎しみから解き放たれる道は、イエス・キリストの御名によって、罪が赦されることであると、ここに、事柄の本質が見抜かれています。私の力ではどうにも解決できなかった罪と死の問題を、贖い主でありまた救い主である方にゆだねよ、ということです。

キリストの予型とも言えるヨセフに、兄たちがうた赦し（創世記50:17）は、十字架上で私たちの罪すべてを担ってくださった主イエス・キリストによってもたらされました。私たちは、そのお方の前に、悔い改めをもってひれ伏すのです。

私たちは、主の十字架と復活による勝利（Ｉコリント15:54、Ｉヨハネ5:4）を宣べ伝え、闇の世にあって光の子として歩むよう派遣されています。

ヨハネの手紙 一 2:13――

若者たちよ、わたしがあなたがたに書いているのは、
あなたがたが悪い者に打ち勝ったからである。

本来、「悪い者に打ち勝った」（完了形）というのは、「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」（ヨハネ福音書1:5 新改訳）という、光でありである御子、イエス・キリストの勝利をあらわしています。

これから長い人生の山坂を歩むであろう、つまり、これから酸いも甘いも噛み分け、経験を積まなければならない「若者たち」に対し、キリストにある勝利宣言がなされています。この世的には、人生上、その勝敗のがりようが不透明な人々に向かって、キリストにある勝利は不動であると、告げられています。

まことに、説教者ヨハネは、油注がれた信仰者であったのでしょう。これから長い人生の山坂を歩まねばならないからこそ、彼ら・若者にとって、自分のたくましさや活力ではない、キリストの御力による勝

利が、人生の基盤となるように、ヨハネは祈る思いで語りかけたのです。片や自分のたくましさや活力と、片や自分の弱さや貧しさとの狭間にあって思い悩んでいる若者の心に染み入る言葉であるに違いありません。

ヨハネの手紙 一 2:17――

世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。しかし、神の御心を行う人は永遠に生き続けます。

先行する2:8「闇が去って、既にまことの光が輝いているからです」の「闇は過ぎ去らせられた」（受身・完了）に続いて、「世も世にある欲も、過ぎ去らせられた」（受身・完了）と記されています。それらのもろもろの悪が「過ぎ去らせられた」のは、まことの光なるキリストが来たからであり、そして、キリストが将来、再び来るからです。「人が永遠に生きる」ということは、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」（ヘブライ13:8）というお方に、自分の内の憎しみをも不安をもゆだねて生きて続けるということです。自覚している憎しみも、（隣人を責めるばかりで自分の側では）自覚していない憎しみも、やがて栄光の主キリストがやって来られるときには、完璧に過ぎ去らされたものとなります。

最後に、私たちが「新しい掟」に生きるために、座右の言葉となるパウロの言葉を読みます。

コリントの信徒への手紙 二 4:16――

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

洗礼をすでに受けられた方は、新しい人とされています。新しい人につくり変えられています。しかし私たちはなお、この世に、また教会に生きていかなければなりません。その時、どんな誘惑にあうか、どんな試練にあうか、分かりません。大切なことは、キリストにあって日々新たにされることです。金銀がされ強められるように、試練にあっても、みみ憎むのではなく、潔められるように（Ｉペトロ1:6-7）、主なる神に願うことです。

パウロは、どんなことが起こっても、落胆しないと言います。親しかった人が「ますます憎むように」なり、打ち倒されるようなことがあっても、信仰者は滅ぼされない、と言います（Ⅱコリント4:9参照）。そのような時、パウロは聖霊の導きにひたすら寄り頼みました。私たちが弱い時にこそ、聖霊が力を与えてくださいます。先へ進む道が開かれます。

茅ヶ崎香川教会月報
No.４３４

２０１６年7月３１日発行
編集発行：日本キリスト教団
茅ケ崎香川教会
発行責任者：小河信一